１８

氏　　名	種市　瑛
学 位 の 種 類	博士（異文化コミュニケーション学）
報 告 番 号	甲第４５８号
学位授与年月日	２０１７年3月３１日
学位授与の要件	学位規則(昭和２８年４月１日文部省令第９号) 第４条第１項該当
学 位 論 文 題 目	行為としての沈黙についての語用論的考察―解釈の枠組みの構築に向けて
審 査 委 員	（主査）平賀　正子 小山　亘 中根　育子（ﾒﾙﾎﾞﾙﾝ大学アジア研究所上級研究員）

Ⅰ．論文の内容の要旨

（１）論文の構成

本博士論文は、「行為としての沈黙についての語用論的考察 － 解釈の枠組みの構築に向けて」と題し、本文・注・参考文献・付表を含め、234 ページからなる。本論文の構成は以下の通りである。

第 1 部 行為としての沈黙を解釈する枠組み

第 1 章 序論
- 1.1 研究の背景
- 1.2 研究の目的と意義
- 1.3 論文の構成

第 2 章 先行研究
- 2.1 言語行為論にもとづく沈黙の解釈
  - 2.1.1 言語行為論
  - 2.1.2 言語行為としての沈黙
- 2.2 ポライトネス理論にもとづく沈黙の解釈
  - 2.2.1 ポライトネス理論
  - 2.2.2 ポライトネス・ストラテジーとしての沈黙
- 2.3 語用実践行為にもとづく沈黙の解釈
  - 2.3.1 語用実践行為
  - 2.3.2 語用実践行為としての沈黙

第 3 章 語用実践行為としての沈黙の分類
- 3.1 話者交替の視点から見た沈黙
  - 3.1.1 分類
  - 3.1.2 特徴
- 3.2 相互行為の視点から見た沈黙
  - 3.2.1 聞き手志向の行為としての新たな沈黙の分類
  - 3.2.2 相互行為として見る沈黙の特徴
- 3.3 沈黙の解釈に見られる多義性と多層性
  - 3.3.1 沈黙の新分類にもとづく分析事例 1
  - 3.3.2 沈黙の新分類にもとづく分析事例 2
- 3.4 沈黙の分類

第 2 部 行為としての沈黙に見られる多義性と多層性の実証的分析

第 4 章 談話データにもとづく沈黙の解釈
4.1 沈黙の解釈
4.1.1 行為と行為者の分析
4.1.2 沈黙の解釈者と解釈の視点
4.2 談話データの比較分析の方法
4.2.1 研究協力者
4.2.2 データ収録の方法
4.2.3 データ分析の方法
4.3 異なる解釈者による沈黙の行為と行為者に対する解釈の比較
4.3.1 沈黙の行為に対する解釈
4.3.2 沈黙の行為者（沈黙者）に対する解釈
4.4 事例分析に見られた沈黙の解釈の多義性
4.4.1 沈黙の行為と行為者の解釈に見られた多義性
4.4.2 解釈者が沈黙を解釈する際の視点
4.5 談話データに見られる沈黙の解釈の多義性

第 5 章 トランスクリプト作成課題にもとづく沈黙の解釈
5.1 トランスクリプト作成者とトランスクリプトの関係
5.2 トランスクリプトに見られる沈黙
5.3 トランスクリプト作成課題
5.3.1 トランスクリプト作成者
5.3.2 データ収集の方法
5.3.3 分析の視点
5.4 トランスクリプトに書き起こされた沈黙の比較
5.4.1 記述の有無
5.4.2 長さ
5.4.3 位置
5.5 トランスクリプト作成者による沈黙の解釈

第 6 章 結論

6.1 沈黙の解釈に見られる多義性と多層性

6.2 本研究の問題点

6.3 今後の展望

（2）論文の内容要旨

本論文では、2 部構成にもとづき沈黙の解釈について論じている。第 1 章から第 3 章までの第 1 部では、まず先行研究を概説するとともに批判的に検討した上で、「語用実践行為」という視点を導入する。すなわち、沈黙を話者の視点のみでとらえるのではなく、相互行為の視点に拡大してとらえることを通して、沈黙の分類を刷新し、新たな沈黙研究を提示する。続く第 4 章から第 6 章までの第 2 部では、沈黙の行為と沈黙者に見られる解釈の多義性と多層性について、会話参与者、トランスクリプト作成者、および研究者の視点から分析、考察を行い、第 1 部で提案した新たな沈黙の分析枠組みの検証を行うとともに、それぞれの解釈者がどのような解釈枠組みの中で沈黙を捉えているのかについて検討する。具体的な章立ては、次の通りである。

第 2 章では、本研究が依拠する「語用実践行為（pragmatic act）」としての沈黙の論考について、Mey（2001）をもとに紹介することを目的とする。行為としての沈黙は、言語行為論やポライトネス理論の枠組みにもとづいた分析がなされることが多いため、これらの枠組みを用いた沈黙行為に対する解釈の特徴についてまとめるとともに、そこに見られる問題点を検討する。その後、従来の研究を批判的に乗り越える語用実践行為論にもとづく沈黙の解釈について説明を行い、本研究における沈黙の位置づけについて論述する。

続く第 3 章では、沈黙者が誰なのかについて検討するための基礎的な枠組みとして、語用実践行為にもとづく新たな沈黙の分類を構築する。従来の沈黙研究用いられている会話分析に基づく分類に見られる特徴について批判的に考察するとともに、語用実践行為論の枠組みにしたがい、特に「聞き手」および「話し手と聞き手の両者」という観点から分類に修正を加え、新たな沈黙者の解釈の枠組みを提案する。さらにこの新たな解釈の枠組みにより、実際の会話に見られる沈黙をどのように捉えることが可能なのかについて、事例をもとに論じる。

第 4 章では、会話参与者および研究者（筆者）がどのような枠組みの中で沈黙の解釈を提示しているのかについて明らかにする。まず、分析方法やデータについて説明を行った後、代表的かつ典型的な事例を取り上げ、会話参与者と研究者の間でどのような沈黙の解釈の多義性や多層性、傾向が見られるのかについて、比較、分析を行う。

さらに第 5 章では、トランスクリプト作成者に焦点をあて、どのような解釈の枠組みをもとに沈黙を捉えているのかについて提示する。まず本研究が採用したトランスクリプト作成課題や研究協力者の詳細について概説した後、実際に集めたトランスクリプト・データをもとに、沈黙の行為や行為者がトランスクリプト作成者によってどのように解釈されて

いるのかについて比較、分析、考察を行い、そこに見られる一致や不一致、傾向について論じる。最後にその結果をもとに、トランスクリプト作成者の持つ沈黙の解釈の枠組みを明らかにする。

最後に第 6 章では、本研究が提示した語用実践行為として沈黙を捉える新たな枠組みにもとづき会話参与者、トランスクリプト作成者、および研究者による沈黙の解釈の枠組みについてまとめるとともに、本研究の問題点と今後の展望について述べている。

Ⅱ．論文審査の結果の要旨

（１）論文の特徴

本研究では大別して 2 つの論考を展開している。第 1 に、先行研究を批判的に概観し、従来の「話し手」中心の沈黙研究から、話し手と聞き手両者による「語用実践行為(pragmatic act)」という新たな視座に立った沈黙研究への転換を主張し、以下にあげる新たな分類の提案―特に、ミュート、リンガー、ベール―を試みている。

(a) ポーズ（Sacks, Schegloff, and Jefferson, 1974 に依る）
同一話者の発話間に生じる「話者」による沈黙
(b) ミュート
同一話者の発話間に生じる「話者ではない人」による沈黙
(c) ギャップ（Sacks, Schegloff, and Jefferson, 1974 に依る）
異なる話者の発話間にみられる、話者交替のため誰にも属さない沈黙
(d) リンガー
沈黙前の発話者による沈黙
(e) ベール(Levinson, 1983 参照)
沈黙後の発話者が行った沈黙
(f) ラプス（Sacks, Schegloff, and Jefferson, 1974 に依る）
誰も発話をしないために生まれる誰にも属さない沈黙

第 2 に、分類の妥当性を検証し、沈黙のダイナミズムを明らかにするために、会話参与者、トランスクリプト作成者、および研究者（筆者）という 3 者による沈黙の解釈を比較検討している。その結果、同じ沈黙という現象が、それぞれの解釈者によって異なって認識されうることを確認したのと同時に、同一解釈者によっても沈黙に多義的な解釈が同時に付与されうることもわかった。また、相互行為のなかで誰が沈黙しているのかを同定する際にも、沈黙行為そのものと同様の多義的な解釈がなされることも示唆された。

以上のように複雑に絡まり合う解釈の諸相に対して、新たな沈黙の分類がより明快な分析の手がかりを提供し、考察の深化に貢献できることが明らかとなった。

（２）論文の評価

二つの点でオリジナリティに富む論考を展開している。第 1 に、先行研究を批判的に概観し、従来の研究に顕著にみられる「話し手」中心の沈黙観をしりぞけ、話し手と聞き手両者による「語用実践行為(pragmatic act)」という新たな視座に立った沈黙へのアプローチを試み、従来の分類を大幅に刷新した分類を提案した点である。特に「聞き手」を沈黙研究のなかで焦点化し、独自の分析を加えた点は従来の「話し手」に中心をおく欧米の言語研究へ

一石を投じるものであり、高く評価される。

第 2 に、沈黙という行為の解釈、および沈黙者の同定にいたる解釈の過程を明らかにするために、会話参与者、トランスクリプト作成者、筆者という 3 者による解釈を比較検討した点があげられる。同じ沈黙という現象が、多義的に解釈される様を、独自の沈黙の分類枠組を使用して、比較分析し、非常に説得力のある論考を展開している。ここでは、データ収集という点からも独自性が指摘できる。異なるトランスクリプト作成者が同一データをどのように転記するかについては、従来ほとんど研究されていないことを鑑みれば、極めて革新的なデータ収集がなされていることも注目に値する。

２つの主要課題を第 1 部、第２部とし、それぞれに論理的整合性を持って章立てが為されており、論文構成という意味でも完成度がうかがわれる。

他方、指摘すべき問題点もある。最大の課題は、データの量と質である。スクリプト作成者 2 名に同一会話を 2 種のメディア（音声のみ、画像と音声）で与え、データを得ているが、このデータは、談話分析に使用されたデータとは異なる。また談話分析に使用されたデータも研究協力者数が極めて少ない。今後はデータを質量ともに吟味し、事例解釈にさらなる深化を期待する。また、論文の文章には冗長な印象を与える繰り返しが散見される。今後の出版にそなえ遂行を充分に行い、内容、形式ともにより高い完成度を目指して欲しい。

このように本研究には未解決の問題点が残るものの、沈黙に関する論文としてのオリジナリティは損なわれるものではない。本論文は、熟考された課題設定、価値のあるデータ収集、適切な方法論の選択、緻密な分析を通して博士学位申請論文に値する研究成果を導き出している。